**２０２０年度　入門講座**

2020年11月８日（日）

**第二十課　イエスの受難と死**

**Ⅰ　エルサレム入城**　ヨハネ12:1-16,20-26

　　　受難週の初めの日曜日を「パームサンデー」と呼ぶ。民衆は棕櫚の枝を持って主イエスを迎えた。その時の枝が、日本の棕櫚とは違うようだということで、共同訳聖書「なつめやしの枝」（=「不死の印」）と訳されている。

その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。

　「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。」

イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる。ろばの子に乗って。」

弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。

　イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中から甦らせたとき一緒にいた群衆は、その証をし

ていた。群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたから

である。そこで、ファリサイ派の人々は互いに言った。「見よ。何をしても無駄だ。世をあげて

あの男について行ったではないか。」

祭りに来ていた大勢の群衆は弟子達よりもはるかに熱狂していた。彼らに迎えられたイエスの地上での最も華やかな日だったと言える。

１．ラザロの蘇りを見た群衆。

２．ラザロの話を聞いて、各地からあつまった巡礼者。

群衆とは何か？　同じ群衆が数日後にイエスを十字架につけろと叫んだ。この大衆の移り気、なんという愚かな事か！イエスはこの群衆の愚かさをよく知っておられただろうに、ばかげた騒ぎを避けられなかった。

自分を王として担ぎ出す群衆に迎合するかのように迎えられてエルサレムに入城した。

祭りに来る巡礼者　信仰の歌を歌いに歌った。（詩編48）

多くの人々が巡礼する理由は死を恐れるからである。都の壮大さをみて、死を超えて導く神の偉大さ、神の確かを感じた。この城壁のように神は死に対してもたくましく、死に対する防壁となってくださると信じたのである。

詩編118:26「ホサナ」祝福を祈る歌。

　ザカリア9:9 「娘シオンよ、喜び歌え・・・」王を迎える歌。

「娘シオンよ、おそれるな」と変形。

　ついにその王が来たと、主イエスを迎えたとき、心から賛美を歌った。群衆の熱狂はイエスが死

に打ち勝ち、ラザロを墓の中から呼び出した人だから。群衆が歓呼したとき、その心の中にあっ

たのは、死を恐れる思いである。

イエスはそのように、ご自分を命の主として迎えられることを受け入れられた。平和の王として

子ろばに乗って入城。イエスは武器を取っての戦いはしない。

死との闘いをし始めておられたイエス→　今、人々の憤りによって殺されるが、復活される。

　死におびえている一人ひとりの心に、死に勝つ信仰を植え付けて下さる。

Ⅱイエス十字架につけられる**（**ルカ２３：１３～３１）

１）ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて言った。あなたたちはこの男を民衆を惑わすものとしてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」

しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ．バラバを釈放しろ」と叫んだ。このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたというのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた、その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決断を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。

　イエス裁判を受け、夜中拷問。翌日最高法院で死刑宣告を受ける。ローマ帝国の支配下でユダヤ人に死刑を宣告する権威はない。ピラトのもとに送られたが彼自身、政治犯なのか宗教的なことか、何のための裁判かわかっていなかったので、イエスを釈放しようとしたが・・・。

　群衆の叫び「イエスを十字架につけよ」；最終的に死刑宣告、日頃善良な民衆がイエスを死に追いやるこの意味の重さ！**主を裁く群衆**私たちもこの「人々」の一人であることを認めざるを得ない。

長い間バビロン、アッシリア、ローマに支配されてきた神の民ユダヤの人は救い主を待ち望んでいた。なぜここまでイエスを拒んでしまったのか。独り子をこの世を送ってまで愛し続けた神を。

人間の罪の本当の姿が現れた。罪とは自分が誰を本当の王とするかによって現れる。

２）イエス度々倒れる。イエスと十字架を担いだ唯一の人

人々はイエスを引いていく途中、田舎から出てきたシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。

「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているか知らないのです。」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちもあざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

　　３）十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。

「お前はメシアではないか。

自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神を恐れないのか。同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いを受けているのだから当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。

するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

三本の十字架が立っている；「真ん中にイエス、他の二人」。あの両側にある三本の十字架は私たちの十字架である。**キリストの教会の象徴**と見ることができる。

パウロは言う。「今はもう自分が生きているとは言えない。主と共に十字架にかけられた。」

無罪だったイエスは、冤罪を訴える代わりに自分を死に渡した人々のために祈っている。究極の祈り。全ての赦しの根源はこのイエスの無条件の赦しにある。人間関係の難しい時代、イエスの言葉により頼むとき、相手を赦すことができ、私たちも許される。

左右の犯罪人・・・自分の中の二人の人間を表している。自分が苦しい状況にあるとき、どちらの態度をとるだろうか？

＊メシアなら救ってくださいと、イエスに文句を言う小さな自分がいる。これが人間の本音であろう。不条理な苦しみの状況に置かれるとき、もう一人の犯罪人にシフトできるか？

＊十字架のイエスの前に立って、主よ、共にいてくださいと、この受諾の祈りができるように！！

４）すでに昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。

　聖所と至聖所を隔てている幕、神と人間を隔てている壁が落ちる。救いの始まり。

　　イエスが十字架上で自分を捧げたとき、人間に恵みが注がれた。

　　「息をわたす」=父なる神が主の霊をお受けになった。

主イエスはこのようにして勝利の凱歌を挙げて息を引き取られた。神の御業がこうして成った。

百人隊長はこの出来事を見て、「ほんとうに、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従ってきた婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

「正しさ」とは＝神のみ心を行う正しさ無条件の愛を貫くこと。私たちもこの正しさを生

きるよう招かれている。

愛は痛みを伴う。このイエスの十字架をとって自分を捨てることが求められている。

死に追いやった群衆になるか、十字架に従った民衆になるのか？悪の力に負けない勇気

と忍耐が必要。十字架を共に担うよう私たちへの招き。